

# なぜ北海道の道は、 旅人を魅了するのか



フリーライター  
小西 由稀

## 非日常空間へ誘う北の道

転地療養という言葉がある。そこまで大げさなものでなくても、人間、日常から非日常へ空間を移動しただけで、気分が楽しくなるものだ。札幌から少し走るだけで、車窓の風景は一変する。西へ向かうと海が見えるし、東へ進むと田園風景が広がる。たった1時間の小旅行でも、立派な転地療養

になるのだ。北海道に住む人間がそう思うのだから、道外から来る旅行者にとって、北海道はまさに別天地といえる。

今、道外に住む大半の人が窮屈なところで暮らしている。そんな人たちにとって、原生花園と海の向こうに利尻富士を望む日本海オロロンラインや、十勝の象徴的風景が続くスーパーストレートなど、信号のない気持ちよく延びる直線道を走る爽快感



日本海オロロンラインから利尻富士を望む

は、言葉にできないほどの感動だろう。前にも後ろにも車が1台もない道。ジェットコースターのようなアップダウンを走る楽しさ。対向車が遠くに見えるのに、なかなか近づいて来ない距離感。頭と心がポカンと気持ち良くなる伸びやかな風景。こんな環境がほかにあるだろうか。

私は旅と食をテーマに、さまざまな媒体で書いたり、伝えたりという仕事をしている。これまで訪ねたエリアは、北海道の7割以上になる。世のため人のため、そして自分のため、ペーパードライバーを貫いているので、移動は一緒に取材をするスタッフの車か、公共交通機関が主だ。バスが半日に1本というエリアでは、地元の方のご厚意に甘え、最寄の駅までしっかり送ってもらうことも少なくない。

そんな時、車中では「変わり映えのない風景でつままないしょ」、あるいは「ここらは何もないからねえ」という話になることが間々ある。どことは言わないが、確かに眠気を誘うつまらない風景もあることはある。しかし、季節や時間帯でまったく違う表情を見せる何気ない風景に、心奪われることも多々あるのだ。取材の道中、どんなに時間に追われていても、疲れていても、気持ちが軽やかになってしまう。名もない風景かもしれないが、それだけで十分魅力的なのだ。

地元の方が、地元の魅力に気づいていないのは、とても残念なことだ。自分の住むエリアの美しさを胸を張って語る人は、多くの場合、道外からの移住者か、進学か就職で一度その街を離れた経験を持つ人だ。誰にでも、自分の住む街の好きな風景はひとつくらいあるはずだ。美しい風景があまりに日常と近すぎて気づかないのか、それとも謙遜をしているだけなのか...

ひと昔前、北海道旅行の主流が大型バスで移動する「周遊型」だった頃、観光地と温泉地が旅の主役だった。時代が平成に移り、旅の移動手段の比重がレンタカー利用に傾きつつある今、旅行者は分刻みの旅程では得られない、心に響く名もない風景との出会いと、地元の人との触れ合いを求めている。住んでいる人が「ここは大したことはない」と片付けてしまうのは、あまりに寂しい話ではないか。せっかくなら、違う季節にもまた訪れたいような、住人ならではの自慢話をうんとしてほしいものだ。

## ドライブが北海道の旅の目的に

ここ数年の傾向として、関東・京阪神・九州の旅行情報誌から、「北海道のドライブ企画」に関する記事依頼が増えている。2泊3日、3泊4日で周れ



然別湖から鹿追へ続く、道道726号

るルートの設定と、その魅力を紹介するといった内容である。私が案内役を務めているホームページでも、「北海道の道の距離感がつかめない」「こんな風景を見たい」といった相談や質問がわんさと寄せられる。

旅行会社のパッケージツアーも、レンタカー付きの需要が伸びている。特に二度三度と訪れるリピーターは、レンタカー利用者が圧倒的に多い。本州発着の個人向けパッケージツアーは、うらやましいほど安い。往復の飛行機、宿、カーナビ付きレンタカーが含まれ、2泊3日で2万円台から。おまけに、フライト時間と宿のチョイスが可能。北海道発着では考えられない料金設定である。

最近では1泊4日、1泊5日で1万円台からという商品も出ている。もちろん、レンタカー付きだ。旅行日数が4日、あるいは5日で、1泊分の宿は付くが、あとは自分が実費で宿を手配するという内容。ツアー商品の概念として、1泊分の宿泊を付けなければならないため、1泊3日以上という設定にしているのだ。

より自由度の高いパッケージツアーの登場により、北海道の旅のイメージは「一度は行ってみたい憧れの大地」から、「何度も行きたい美しい大地」へ徐々に移行しているように思う。こうなると旅行

というより、週末のドライブに出かける感覚に近いかもしれない。

では、ドライブ旅を楽しむ人の目的はどこにあるのだろうか。目的はさまざまだが、最大公約数でいえば、「美しい風景を気ままに眺めたい」「気持ちのいい道を走りたい」がモチベーションになっている。ぬかびら温泉の露天風呂で一緒になった女性2人組は、北海道の感想を「白樺の並木がずっと続いて、本当に気持ちがいい」と話していた。多分、国道273号線を指しているのだと思う。ある宿で出会った男性は、初めて体感した地平線について、熱く語っていた。「北海道は何気ない風景がすごくいい」という感想をよく聞くが、まさにその通りである。

数年前の夏、東京から栃木へ向かう高速道路を走っていた時のこと。車窓には、それは美しい緑深い山々が連なっていたのだが、私は何ともいえない違和感を感じていた。ふと空を見上げた時、その理由にはたと気づいた。景色の奥行きが明らかに違うのだ。北海道ではどんなに高い山がそびえていても、緑濃い林が広がっていても、不思議と圧迫感はない。空は大きく、開放感がある。空気もきれいだ。内地にだって、きれいな風景はいくらでもある。でも、これだけスコーンと抜けるような、広がりを持つ風景は北海道ならではだ。



パッチワークのような、8月の美瑛丘風景

## 旅と道と景観美の関係

大自然の手つかずの美しさに加え、人間の営みが作り出す風景の美しさもまた、旅人を惹きつける大きな魅力である。たとえば、パッチワークのような田園風景、防風林の影が描く十勝野の幾何学模様、一夜干しの魚がすだれのように下がる漁村風景、道沿いに優美な馬の姿を楽しめる日高路、牛が点在する牧歌的な中標津・ミルクロードなど。挙げるときりがない。美瑛や富良野には、ポツンと立っている1本の木をよく見かける。カメラマンに人気の被写体だが、元々は農家さんが日陰でひと休みするため、1本だけ切らずに残したものだと言ったことがある。打算的ではない、生活の知恵によって長い年月を経て育まれた景観美は、風土の財産である。雄大な自然にアクセントを添え、より豊かな表情を演出しているのが、北海道の道は長距離を走っても飽きが来ないのだろう。ドライブ旅を目的としたリピーターが増えているのも納得である。

一方で、困った問題も浮上している。人気が集まり、旅行シーズンに交通量がグンと増えるエリアでは、道が整備され、駐車場がつくられている。おまけに、“アイスクリーム”と書かれたののぼりが

立っていたり、派手にペイントされた大型バスが景観を台無しにしている。しばらくぶりに出かけると、あまりの変わりように驚くばかりだ。渋滞緩和など然るべき目的があつてのことだろうが、生活の中から生まれた景観美と、人工物のそれはまったくの別物。軽井沢や湯布院に情緒がなくなってしまうように、カントリーサイドならではの情景がなくなりはないだろうか。いい場所だから教えた。でも、いい場所だから秘密にしておくべきか。私たち情報を伝える側にジレンマがつかまとう。

「広い視野に人工物が映り込まない景観は、日本にはもう北海道しか残されていない」。ある写真家がインタビューで語った、この話がとても印象に残っている。「内地にないものが北海道にはある」。そう言ったのは、北海道通の旅行情報誌の編集長だ。それは雄大な景色だったり、のんびり流れる時間だったり、爽やかな空気だったり、開放感だったりするのだろう。今後、間違いなくドライブ目的の旅は拡大していく。そして、名もない風景とそこに延びる道は、多くの旅行者を魅了していくと思う。道と景観美、あるいは道と旅を考えた時、旅人の期待と想像力を奪ってしまうような観光地化はぜひとも避けたいものだ。名もない風景は名もないまま、残っていてほしい。



牛乳を運ぶ道“ミルクロード”中標津町